

川崎市における希少水生生物の分布調査

梶 一成（川崎市公害研究所）
若山朝子（同上）
吉田謙一（同上）

1 はじめに

絶滅のおそれのある野生生物（以下レッドデータ生物と略す。）については、1966年にIUCN（国際自然保護連合）が世界的な規模で絶滅のおそれがある動植物を選定し、その生息状況などを明らかにした。これを受けわが国では、植物については1989年に日本自然保護協会と世界自然保護基金日本委員会が「我が国における保護状重要な植物種の現状」を刊行し、また動物については1991年に環境庁（環境省）が「日本の絶滅のおそれのある野生生物？脊椎動物編？」、「同？無脊椎動物編？」を刊行し、さらに1999年に「汽水・淡水魚のレッドリスト見直しについて」を公表している。また、神奈川県では1992年に神奈川県レッドデータ生物調査団」を設立し、3カ年の調査を経て1995年に「神奈川県レッドデータ生物調査報告書」（神奈川県立生命の星・地球博物館）を刊行した。

川崎市においては、種々の動植物の生息状況について1987年から市民自然調査団（川崎市教育委員会・青少年科学館）による継続的な調査が行われてきており、レッドデータ生物についてもその生息地域の概略については把握されてきた。また、市内河川等においては、川崎市公共用水域水質測定調査の中の水生生物調査（川崎市環境局）、多摩川河口干潟の生物・底質調査（川崎市環境局）、市内河川生物調査（川崎市公害研究所）、親水施設調査（川崎市環境局、川崎市公害研究所）、早野聖地公園内溜池水質調査（川崎市環境局、川崎市公害研究所）によりレッドデータ生物の生息が報告されている。

そこで過去に生息が報告されている水生のレッドデータ生物とその生息域周辺でみられる動植物を対象に「川崎市希少水生生物調査」を実施し、生息状況を確認したので報告する。

2 調査内容

2.1 調査期間

調査期間は2002年4月から2003年3月までの1年間で、延べ27回調査を行った。

2.2 調査地点とその概要

調査地点は図1のとおりである。

調査地点は5地区9地点で、麻生区黒川地区5地点、早野地区1地点、多摩区中野島地区1地点、宮前区初山地区1地点、川崎区大師地区1地点とした。



図 1 調査地点と対象生物

(1) 麻生区黒川地区

ア 黒川 1

この地点は、右岸側が人工林、左岸側が水田と休耕田となっており、水路、水底ともに自然の砂・泥である。水源部は上部からのしぼり水を集めた塩ビ管から流入している。最上部の後背地は住宅地となっている。

イ 黒川 2

この地点は、右岸側が自然林、左岸側が水田、休耕田となっており、水路の上流部は湿地、下流部がU字溝または3面コンクリート張りとなっている。水源部は1カ所は湧き水、もう1カ所は上部からのしぼり水を集めた水路である。最上部の後背地は大学のキャンパスとなっている。

ウ 黒川 3

この地点は、両岸が自然林、その間が水田となっており、水路の上流部は自然の砂・泥、下流部がU字溝、雨水枡となっている。水源部は2カ所の湧き水である。最上部の後背地は自然林となっている。

エ 黒川 4

この地点は、右岸側が自然林、左岸側が畑地となっており、水路の上流部は湿地、下流部がU字溝、雨水枡となっている。水源部は耕作地からの流出水及び湧き水である。最上部の後背地は耕作地となっている。

オ 黒川 5

この地点は、三沢川の上流部で右岸側は住宅、果樹園、左岸側は住宅地となっており、両岸はコンクリートブロック、川底は砂・泥、岩盤などである。

(2) 麻生区早野地区

この地点は、早野聖地公園内にあり、両側が自然林、水路はすべて砂・泥で、水源部は湧き水となっている。池と池の間の湿地、休耕田の水は上部の池からの滲出水と溢水である。ため池改修時に、より自然に近い工法ということで、護岸に蛇籠等を設置している。

(3) 多摩区中野島地区

この地点は、二ヶ領用水の上流部で周辺は住宅地、果樹園で、両岸はコンクリートブロック、川底は礫・砂・泥である。

用水改修時に「多自然型の川づくり」の工法を取り入れた親水護岸となっている。水源は多摩川である。

(4) 宮前区初山地区

この地点は、右岸側が自然林、左岸側が畑作地で、両岸はコンクリートブロック、川底は人工的な礫に泥が堆積している。改修時に「多自然型の川づくり」の工法を取り入れた親水護岸となっている。水源はゴルフ場の池からの流出水と右岸壁面からの湧き水・滲出水である。

(5) 川崎区大師地区

この地点は、多摩川右岸河口部にひろがる自然にできた干潟である。

2.3 調査対象及び調査方法

調査対象及び調査方法は表 1 のとおりである。

調査対象としたものは、過去の文献により生息が確認されているもののうち目視により種類の判別が容易で、比較的市民にもなじみやすいものとした。

表 1 調査対象と調査方法

	採取方法	確認方法	調査時間
魚類(ホトケドジョウ, メダカ, トビハゼ)	手網	目視	30分間
トンボ(カワトンボ, ハグロトンボ, チョウトンボ)	捕虫網	目視	30分間
ホタル(ゲンジボタル, ヘイケボタル)	捕虫網	目視	30分間
植物(カワモズク, ヒシ)	素手	目視	-

- ・絶滅危惧種 : ホトケドジョウ, メダカ, トビハゼ(東京湾奥部), カワモズク
- ・県内絶滅危惧種 : チョウトンボ, ヒシ
- ・県内減少種 : カワトンボ, ハグロトンボ
- ・その他周辺生物 : ゲンジボタル, ヘイケボタル

3 調査結果

調査結果は表 2 のとおりである。

表 2 調査結果

調査対象		調査地区					早野	中野島	初山	大師	備考
		黒川									
		1	2	3	4	5					
魚類	ホトケドジョウ							-		-	
	メダカ						-	-	-	-	地域の固有種ではなく放流または移入によるものと考えられる。
	トビハゼ	-	-	-	-	-	-	-	-		
トンボ	カワトンボ			×	×		×	-	-	-	
	ハグロトンボ	×	×	×	×		×		-	-	
	チョウトンボ	×	×	×	×	×	×	-	-	-	1997年までは早野地区の溜池で生息が確認されていたが、今回は確認されなかった。
ホタル	ゲンジボタル	×			×	-	×	-	-	-	
	ヘイケボタル	×	×			-	×	-	-	-	
植物	カワモズク	×		×		-		-		-	
	ヒシ	-	-	-	-	-	×	-	-	-	1998年までは早野地区の溜池で生育が確認されていたが、その後の調査でも確認されておらず今回も確認されなかった。

○：生息を確認できた ×：生息を確認できなかった -：調査対象外

当初対象としていなかったイモリ（県内絶滅危惧種 F）も黒川 4 で確認された。

4 おわりに

今回調査対象とした生物の他に、魚類ではニゴイ、ウキゴリ、トンボではヒヌマイトトンボ、ムカシヤンマ、ネアカヨシヤンマ、植物ではヒメウキガヤなども過去の調査で報告されており今後調査対象を更に広げる必要がある。

さらに生息域の水質のみならず調査地域の周辺環境として植生、土地利用なども調査項目に加えて生息域の保全手法の検討を進めるための調査としていきたい。

「引用文献」

- 1)環境庁(1991)「日本の絶滅のおそれのある野生生物?脊椎動物編?」
- 2)環境庁(1999)「汽水・淡水魚のレッドリスト見直しについて」
- 3)神奈川県立生命の星・地球博物館(1995), 神奈川県レッドデータ生物調査報告書
- 4)福嶋 悟他(1994) 横浜市内におけるカワモズク (*Batrachospermum moniliforme*) の季節的な出現状況とその分布, 横浜市環境科学科学研究所報第 18 号, p35-42
- 5)林 長閑・小林正人(1991) 川崎市のトンボ類・チョウ類, 川崎市自然環境調査報告, p95-109
- 6)川崎市(2001) 川崎市公共用水域水質測定事業(市計画)(多摩川河口干潟の生物・底質調査)報告書
- 7)丸山 朝子他(2001) 川崎市河川の魚類と底生動物分布の推移(1977-2000), 川崎市公害研究所年報第 28 号, p22-28